

# 『家相方位指南』にみる江戸の家相説

三〇

村 田 あ が

## 緒言

江戸時代中・後期の家相文献から当時の住まいの状況を読み解く作業が続いている。本稿では家相書『家相方位指南』を取りあげることが、明治時代に翻刻され、大正初期に再版された本書は、江戸時代中・後期以降に多く流布した家相書の一例と推測される。内容の分析を通して成り立ちや構成について考察し、江戸時代中・後期の家相説の展開の解明の一助としたい。

### 一、『家相方位指南』について

本書は上中下三冊からなる和綴じの版本であり、上巻十七頁、中巻五頁、下巻十二頁よりなり、文章の他に図、表を多く含む。底本としたものは東京家政学院大学図書館大江文庫所収の版本である。

扉には「宍戸先生著 全三冊合帙 家相方位指南 平かな図入 一名運の親 東京 廣布館発行」とある(図一)。序文や目次もな

く一頁目の冒頭にまず図が入り、続いて「家相方位指南 東易館 宍戸頼母富隣著」と書名、著者名を記し、次の行から本文が始まる。

扉も本文も明治時代に翻刻された際に写し書かれたものと推察されるが、その体裁は一般的な江戸時代中・後期の家相文献に比べても一頁に納まる情報量(文字数や図、表)が多く、簡便にまとめることが目されたと推測できる。

本文冒頭には自序に相当する部分があるが、この末尾に「天保六乙未春」とあるので、天保六年(一八三五)に書かれたものであることが知れる。本書に関する情報は、江戸時代以降の書物を広く扱った国書総目録<sup>1)</sup>には見あたらなく、古典籍総目録<sup>2)</sup>にも記載がない。江戸期の著者名から引く国書人名辞典<sup>3)</sup>には宍戸頼母に関する記載があるが、彼の著書として本書名は記されていない。明治期に翻刻されたもののみが存在し、江戸期の写本なり版本なりは存在しないため、記録にないと考えることが可能である。

国書人名辞典によると、著者の宍戸頼母は、生没年は未詳である

が明治十五年（一八八二）頃没したとされる。名は富隣、字は貴徳、通称頼母である。号は謙堂、東易館、貞廬である。仙台藩士であり、天保十三年（一八四二）頃、江戸お玉ヶ池に住み、易学<sup>44</sup>、家相を以て名をなした。

著書に『家相改正図誌』、『相宅知天鏡』、『方位明鑑』があると記されるが、何れも刊年は記載されていない。頼母に仮託して後世に書かれたものでないとするれば、この他に少なくとも本書を記していることになる。また明治期の家相文献である『家相新編』<sup>45</sup>の記載により、『相宅知天鏡』は明治七年（一八七四）刊であることが、明らかになった。

巻末には「明治二十三年五月二十日翻刻御届 大正四年六月二十日再版 著作者 宍戸頼母 発行兼印刷人 東京市京橋区豊町十

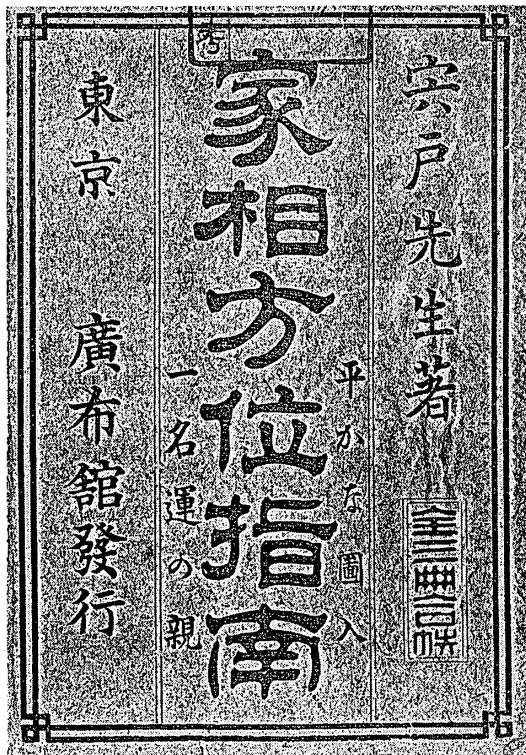


図1 『家相方位指南』扉（東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本より転載）

七番地 鈴木荘太郎 発行所 東京市京橋区豊町 須原屋書店」と記載され、本書が明治二十三年（一八九〇）に翻刻され、大正四年（一九一五）に再版されたものであることが分かる。頼母の死後に翻刻、再版された可能性も高い。江戸絵図と武鑑の版元で売った江戸の大手書肆の須原屋が発行しているが、須原屋は江戸中・後期以来、京大坂の家相文献の取り次ぎも多く、家相関連文献の需要に詳しかったと推測される。

本書が頼母により書かれたとされる天保六年は、前年に水野忠邦が老中となるが、米価高騰や相次ぐ江戸の火事、地震の頻発、インフレ貨幣であった天保通宝が鑄造されるなど、不穏な世相である<sup>46</sup>。天保年間には数多くの家相文献が世に現れ、国書総目録、古典籍総目録で調べた範囲でも、三十文献を数える。多くは畿内での刊行であるが、畿内を代表する家相流派を率いた松浦琴鶴の著作などは、江戸においても出版され流布した。不安な世相を反映し、家を改めることにより凶相を避け吉相を手に入れようとする人々の願いをそこから読みとることができる。

## 二、『家相方位指南』の構成

先述したように本書は目次が省かれているため、ここでは上中下巻ごとにその内容を概説し、全体の構成を明らかにしたい。本文と図表が混然とし、図中に説明文が記載される場合もあるため（図二）、図表の題名<sup>47</sup>と本文の内容を記載されている順に従い記述すること

により、全体の構成を示すこととする（表一）。

この表を見ると、本書は上巻で家相の方位別吉凶について図と共に解説し、中巻で年月別の二十四方位の吉凶を示し、下巻で八卦と暦を用いての吉凶判断の実践を示していることが分かる。つまり本書は、読者が家相判断の内容を理解し、普請や改築、引越をする際の日取りと方位について知るために編まれたものであることが明らかである。

家相の方位別吉凶の項目を見る限りでは、三都を中心に同時代に流布した松浦派の家相文献の内容と大きく異ならず、家相文献の構成も一般的である。暦や本命星と家相を相関させるものもこの時代珍しくはないが、家相説を説明し、具体例や間取り図を多く掲げるものと比べると、暦に関する記述が多くを占めており、家相で家を整えることよりも「いつ、改築や引越しを行うか」をより重視している本書の特徴が明らかである。

### 三、自序の翻刻と解説

本書の家相説に対する考え方を明らかにするために、ここでは自序にあたる上巻冒頭の文章を翻刻し、解説する。紙幅の都合上、改行や表記は底本の通りとはせず、読みやすさを優先して句読点も加え、旧字体は新字体に書き換えて掲載する。

夫れ人の禍福究達は専ら居地室宅の備えより起こる所にし  
て、城郭の準繩、神仏の備えといえども、其の備え陰陽順和

の理を布く時は、禎祥多く盛榮し、相剋倚逆の備えを構える時は、災殃多く衰枯すべし。

故に天道に順いて方位を撰び、地理に則りて家相を正うする時は、孟子にも「居は氣を移す」と云う如く、心も自ら善に遷り、孝悌忠信の道興り、孤独の相ある人も配偶を得、良き子を設け、薄命者も漸々遇時すべし。

又天の祐けを得る吉方あり。災難にあう凶方あり。是を知らずして猥りに土木を犯し、或いは身を動かし衰運となり、鬼神の祐けなき故に其の思慮するを皆凶道にして、為事悉々災害となるべし。

家相と方位は車の両輪の如くにたとえ、家宅を吉相に改正すとも、凶方を犯す時は、家相の徳未だ顕れざる内に方崇り発し

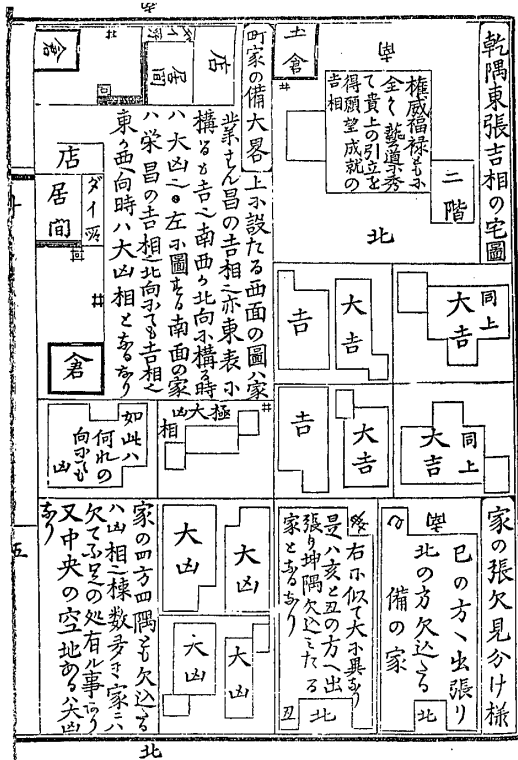


図2 『家相方位指南』上巻5頁（東京家政学院 大学図書館大江文庫所蔵の版本より転載）

表1 『家相方位指南』の構成

巻	頁	文・図・表の別	内容	題名記載の有無		
上	1	図	九宮二十四方位図	有		
		文	自序	無		
	2	図	八卦の図	無		
		図	城郭の図	無		
	3	図	東張吉相の図	有		
		図	東張に類する吉相の図	有		
		図	東張に似て巽艮の両欠となる凶相	有		
	4	図	未張凶相の地も家構にて吉相となる図	有		
		図	巽隅張吉相の図	有		
		図	乾隅張吉相の図	有		
		図	坤艮の両欠大凶相図	有		
		図	辰巳欠に類する図	有		
		図	戌亥欠同様大凶相	有		
		図	艮隅の欠込み大凶相	有		
		文	敷地の吉凶, 四神相応	無		
		文	家宅の構格	無		
		図	巽北張乾の倉大吉相の図	有		
	5	図	棟数多き吉相南面の図	有		
		図	乾隅東張吉相の宅図	有		
		図	家の張欠見分け様	有		
		図	町家の備大略	有		
		図	地形吉相の図	有		
	6	図	同凶相の図	有		
		文	屋敷形の方位別吉凶	無		
		文	門戸の方位別吉凶	無		
	7	文	土蔵の方位別吉凶	無		
		文	井戸の方位別吉凶	無		
		文	雪隠の方位別吉凶	無		
		文	浴室の方位別吉凶	無		
		文	流走の方位別吉凶	無		
		文	手水鉢の方位別吉凶	無		
		文	神棚の方位別吉凶	無		
	8	文	仏壇の方位別吉凶	無		
		文	竈の方位別吉凶	無		
		文	窓の方位別吉凶	無		
		文	池泉水の方位別吉凶	無		
		文	築山の方位別吉凶	無		
	9	文	壘間取の壘数による吉凶	無		
		文	井戸穿改の伝	無		
		文	雪隠を改める時の伝	無		
		表	歳徳明方の表	無		
		文	金神殺を征服する伝	無		
	10	文	大將軍殺を征服する伝	無		
		図	本命的殺と二十四方位の図	無		
		文	本命的殺	無		
図		東向き門戸口の図	無			
文		東向き門戸口の場合の吉凶	無			
図		南向き門戸口の図	無			
文		南向き門戸口の場合の吉凶	無			
図		西向き門戸口の図	無			
11	文	西向き門戸口の場合の吉凶	無			
	図	北向き門戸口の図	無			
	文	北向き門戸口の場合の吉凶	無			
	図	門戸入口開き所のよしあし	有			
	図	雪隠の付様	有			
中	文	門戸と前面道路	無			
	文	雪隠と窓, 入口	無			
	文	門柱を接ぐこと	無			
下	12	文	家作に隠木を用いること	無		
		文	庭前樹木	無		
		図	竈の向きと朱冠鳥扁額図	無		
		文	竈の向きと整え方	無		
		文	竈井廁, 艮坤中は家相第一の要所	無		
		文	都会の二階建て	無		
		文	一棟の家を片方新たにする場合	無		
		文	穴倉は大凶	無		
		文	厩牛屋の作り方	無		
		文	唐白場の作り方	無		
	13	文	石碑の作り方	無		
		文	家相改正と先祖の祀り方	無		
		文	墓の整え方・墓相	無		
	14	文	土地による風水の違い	無		
		14	文	地域別吉凶 山城・武蔵・日向・三河 伊勢・越後・出雲・信州・奥州・南部 尾州・駿河・近江・摂州・相模・上州 下野・出羽・松前・肥前	無	
				図	敷地を49分割して地面を均す図	無
				図	吉相繁栄の図	有
				文	吉相繁栄の図の説明	無
				図	鳥居の図	無
		14	文	宅地内鎮守の宮の場所と向き	無	
				壘数の取捨と八卦	無	
		17	文	壘間取りの改正	無	
		全	図	年月別二十四方位の吉凶図	無	
	1	文	八卦と九星と曆	無		
		2	表	永年方位	有	
3		表	朱雀火	有		
		図	二十四方位版(中央部回転可)	無		
4		文	方位選択の困難さ	無		
		表	本命の繰り方	無		
		表	本命の繰り方	無		
5		文	本命星を生じる星の方	無		
		表	年別九星表	無		
6		表	毎月日取吉凶	有		
		文	月日時を選び方	無		
		表	時の九星くり様図	有		
7		文	吉神会合の方	無		
		図	九星の本位並びに性	有		
		表	本命星と生旺死殺	無		
8	文	本人の本命星と生旺死殺	無			
	表	暗剣殺などと本命星	無			
	文	年月日時と生克旺相	無			
9	表	三元生命宮	有			
	文	家を改めることと曆の関連性	無			
10	表	生まれ年の干	無			
	文	命禄吉神	無			
	図	年別干支二十四方位図(中央部回転可)	無			
11	図	解神繰りようの図	有			
	文	凶方を犯した場合	無			
	図	磁石居処中央の取様	有			
12	表	年々吉凶方位	有			
	表	月々吉凶方位	有			
12	文	あとがき	無			

て、種々災難起こり重きは死亡絶家にも及ぶべし。たとえば地理家相を撰ばざるは、畑へ稲を植え田へ麦を蒔くに同じく、方位時節を犯すは、寒中に稲を植え、暑中麦を蒔くに異ならず。

然るに、「死生命あり、富貴天にあり、道を以て真を守らば何ぞ殃あらん」などというは、乳臭儒の口業、命を知り天を楽しむなどは、斗筭徒の及ぶ処にあらず。縁木求魚巖墻の下に立ち、頭上へ大石の墜掛かるもしらず座るなかれ。是に厭れ死して命に安んずるとならば、何故に周易の凶をさげ吉に就き命を易うるの理を示したまわんや。

又世上の占見者流は、相宅風水の奥妙は未だ夢にも見ず、只不練の末、書を閲し或いは附会の妄説に酔い、人をして得失を誤らしむる事少なからず。予深く是を愁い、普々古書を探り、其の要を取捨すること多年、又、諸州遊歴して土地の広狭、山川の遠近、国土の風水に従い、家宅を相すの事数百家、其の吉凶を試るに書に泥むべからざる事多し。故に天眼自然の術を得、その地に臨み其の家を相するに及びて、吉凶を指事的然たり。あに庸人の螢火を以て物を探るの論と日を同じうせんや。

又世上の妖相者に遇者は、家を新たに作り改め、或いは倉庫を潰し、又は井泉を埋め、黄金を擲つ事少なからず。其の費財の為に倒るるもの亦多し。嗚呼傷かな。其の福を求めて禍を得る事、所謂「角を直さんとして牛を殺す」の諺に類すべし。故に其の誤りしらしめん事を欲す。敬天之休卜体、恒吉を視

し、駆善くこれ正家祈天永命の一助たらしむ。

天保六乙未春

以上が序文である。人の禍福は家屋敷の備え方によるものであり、城郭や寺社も同様である。幸いを招き、或いは災害を招いて衰微することもあると述べ、方位を撰び地理に則り、家相を整えることの重要性を説いている。

家相と方位はその両方を吉相に整えないと死に至り、または家が絶える結果をも生じるといひ、家相を軽んじた場合の災いについて「お家断絶」を最も悪い例として挙げてゐる。さらに、地理家相を撰ばず方位時節を犯すことを禁じ、その土地に応じた家屋敷の建て方、家相の整え方、普請、改築、引越の方位と時節の選び方について配慮することを奨めてゐる。

他の家相相者の文献による家相判断に警鐘も鳴らし、自らは古書を渉獵するのみならず、諸国を遊歴し、実地に数百件の家相判断の経験を積むことにより、書になじまない例が多いことを知り、自説を確立したと述べてゐる。

このように経験からまとめた家相説である点を強調する場合は、多くはその具体例を挙げ読者の理解を得るといふ家相書の構成となるが、本書の場合は要点のみをまとめ、むしろ暦や生年による方位別吉凶の早見表の役割を重視したためか、家相説の内容に関する具体例は挙げられず、いささか序文と本文の内容が乖離する。

ともあれ、本書の内容は家屋敷の家相を整え、時節を撰んで普請、改築、引越など家屋敷に関わる作事を行う規範を示すものであることは明らかになった。

#### 四、頼母の家相説

ここでは、方位別吉凶の判断基準となる著者の家相説の分析を通して、本書の家相説の内容を明らかにしたい。上巻の本文から特徴的な部分を抜き出し、翻刻して解説を加え、考察をする。

##### (一) 敷地の形状と四神相応

宅経に曰く、凡そ宅地平坦なるを名づけて梁土と云う。之に居る時は吉なり。回り高く中央窪なる地を衛土と号く。中の平低なる処に家を構えれば、自然と四方より人集まり蕃榮す。然れども火災論訟起こるべし。

又周書秘奥に曰く、前低く後ろ居高き地を号けて晋土と云う。富貴蕃榮の地なり。又西高く東低き地を魯土と号く。是又富貴にして文道盛んなるべし。西北高く東南低く開けたる地は、此二つを兼ねて、富貴蕃榮最勝の相なり。又南高く北低きを楚土と号け、貧地とす。東高く西低きを齊土と号く。是又凶相なり。北に山、東に流水、南に田圃、西に林有るは四神相応の大吉相とす。宅地の相も右の理を推して知るべし。城府郷村右同断なり。

宅経<sup>10</sup>、周書秘奥<sup>11</sup>を出典典籍として敷地の形状について述べる点は、同時代の一般的な家相文献と変わらない。梁土、衛土、晋土、楚土の吉凶も、敷地の日照を鑑みて理にかなったものであり、特に著者独自の経験から編み出したものではない。

しかし、次の四神相応に関する表現には、一点変わった点が見られる。良い敷地の選定基準として、北に山、東に流れ、南に田圃（或いは池水など）、西に大道というのが一般的な四神相応の表現であるが、ここでは西に林があることを推奨している。これは著者の経験による解であると推測することが可能であり、具体的に著者が家相を見て回った地域を特定することは本書からは不可能ではあるが、西側からの風を除けるなどの要請から、屋敷林を必要とする地域的な特徴と考えることも可能である。

##### (二) 家宅の構え方

家宅の構格は、是又右同断の理にして、中央より西北高く東南の建物は棟低きは順にして吉なり。坤隅か艮隅などに高樓有るは、宅主障り、血統乏しく婦<sup>こけくらし</sup>□□の家となるべし。乾隅へ張り出て高閣有るは、官禄共に全て富貴の相なり。

家は東西南北共に出張るは吉なり。乾隅巽隅の出張るは、尚々富貴長久の相なり。然れ共巽乾と両方共に出張るは大凶なり。外に吉相の出張あれば吉なり。四方共に同断なり。

坤艮両隅へ出張るは、短命病災たえず、又長命なれば中症を患い、又血脈乏し。

家屋敷の高さは、西北が高く東南が低い作りは吉という。これは日照を考えれば妥当であるし、他の多くの家相書にも同様な記述がある。次に艮坤隅に高樓のある場合は凶であるというが、これは家相説の特徴である鬼門（艮）、裏鬼門（坤）の忌避であり、家相説ではこの二方位に関しては何らの特徴的な造作も行つてはいけなとするのが常套である。

本書の場合も同様な記述であり、その場合の災禍として、宅主に障りがあり、血脈が途絶え、後家暮らしの家となると警告している。ここでも男子の子孫が絶えずに「お家安泰」となることが希求されるが、この点も他の家相書との差は認められない。従つて、本項目に関しては著者の独自性は見あたらない。

### (三) 住まいの部位別の吉凶判断

表一にも示したように、上巻六頁以降は住まいの部位別の吉凶判断が文章で記されている。屋敷形、門戸、土蔵、井戸、雪隠、浴室、流走、手水鉢、神棚、仏壇、竈、窓、池泉水、築山、畳間取りの順に各部位の方位別吉凶を示すが、ここではこれらを①屋敷形、門戸、土蔵、②井戸、雪隠、浴室、流走、手水鉢、③神棚、仏壇、④竈、⑤窓、⑥池泉水、築山、⑦畳間取りのように関連する七つのグループに分け、本文の一部を翻刻すると共にその吉凶判断の内容を検討する。

#### ①屋敷形、門戸、土蔵

屋敷形では、「東張は願望成就名を發す。辰巳張は家業繁昌、

遠近より福分有る地面を増やすべし。南張は富貴なり。」と吉相の屋敷形を述べる一方、「丑寅張大凶。家運おとろえ子孫血脈乏し。又は虚弱の人出来、住主短命或いは中症などの病難しげく、種々伝弁有る所なり。」と凶相の記述もある。

門戸では、「門戸は家宅の外にして、所謂五祀三祀の一箇なり。開き方大小利害あり。一家の禍福凡そ是によるといへり。」と、門戸の重要性を述べた後、「東西南北共に出張りてあるは大吉なり。」と吉相を述べ、また「東向き長屋門などは惣領の男子に障り、色情口舌、又は音曲に心をよせ、医者出入りしげく、又鶏の宵鳴きする事あり。又白花咲く木有りて、其の下に青石埋まり有るべし。穿り出して□べし、口伝」と凶相の判断を述べる。

土蔵では、「土蔵は戌亥の方、辰巳の方に有るは大吉なり。北南東西も吉なり。」と吉相を述べ、「未申の方、丑寅の方は大凶なり。子孫に障り、病難、手足不自由、中症の類、又は短命其の備えにより種々判断有る所なり。」と凶相を示す。

敷地内における母屋の形状を「張り・欠け」により特徴づけ、各方位における張り欠けにより吉凶判断を下す。門戸は、方位と敷地から張り出す、欠け込む形の門であるか否かにより判断する。土蔵は敷地中央から、或いは母屋から見た場合、どの方位にあるのかにより判断を下す。それぞれ、方位別に様々な吉凶判断の内容が述べられるが、家相を整えることにより、惣領の男子による血脈を絶やさず、家運を上げることが目されていることが分かる。

また丑寅と未申を結ぶ凶を示す軸と、これと直交する戌亥と辰巳を結ぶ吉なる軸が意識され、重要視されている傾向が認められる。

### ②井戸、雪隠、浴室、流走、手水鉢

井戸では、「井戸は東の方大吉。其の備えにより秀才の男子出生、名を遠近にあらわし、家業繁昌なり。」と吉相を述べ、「未申は妻子無事なりがたく、病難色々伝弁あり。」と凶相を示す。

雪隠では、「雪隠は四方四隅共に凶なり。十二支の方を除け、十干の部へ構えてよし。癸などは好まずなり。東にあれば相続人に障り、願望を妨げ、家おとろう。」と、吉相の表現がほとんど見あたらない。

浴室は、「浴室是又不浄なれば、正当を除けて、十干の間へ構えてよし。並びに辰巳に在るは、芸有りて名をひろむる事あり、口伝。」と吉相を述べ、「南凶なり。眼病又心労たえず。色々判断あれ共ここに略す。」と凶相を述べる。

流走とは敷地内での遣り水など、水の流れる道を言うが、「流走は東、辰巳、西、戌亥共に吉なり。北も可なり。其の外は凶なり、口伝。」と一文のみ載る。

手水鉢も一文のみであり、「手水鉢、戌亥有るは大吉。辰巳、東も吉なり。西北無事。其の外凶。」とある。

家相説では、住まいにおける日々の生活に欠かせないものを扱う場について細かく検討を加えるが、ここでは不浄な場である便所と浴室、水回りに関する方位別吉凶を問題にしている。特に雪

隠は東西南北の四方、乾坤艮巽の四遇、子丑寅卯…の十二支の各方位のうち、いずれにも置いてはならず、それらから少しづつずれた位置にある甲乙丙丁…の十干の方位に備えよと言う。

次の浴室の項にも「正当を除けて」とあるように、これら「不浄」な場所は、方位の正当に置くと、その方位に関わる判断の内容を直接的に受けてしまうので、それを僅かずつ避けよ、と指示している。方位が意味を持ち、吉ならばそれを積極的に享受し、凶であり、避けようがなければその害をまともに受けぬように少しでも位置をずらす、という家相解釈上の知恵が示されている。方位を見ると、不浄や水回りは南を凶とする例が多いことが分かる。これは、住まいの表側である南から湿気を遠ざけると同時に、日照による水や不浄物の腐敗を防ぐという生活上の知恵とも合致する。

### ③神棚、仏壇

神棚は、「神棚は間数多き内は清浄なる間へ祭るべし。往来の見付又は寝所の間など除けて設くべし。」とあり、「戌亥の方大吉。」と言う。凶方については示されていない。

仏壇は、「仏壇是又尊敬を専一とし設くべし。大略神棚に同理なれども、丑寅に在るは大吉なり、口伝あり。西も又吉なり。其の外好まずなれども、備えにより設け方有るべし。」と言う。

このように、神棚、仏壇は清浄な間に祀り、「尊敬を専一」とすることが方位よりも重要視され、往来から見通せる場所や寝室



には設けるなど言う。住まいにおけるあらゆる造作で凶を示す丑寅の方位も、仏壇を置くことは大吉であるとし、あらゆる凶を仏壇により防ごうとする著者の解釈が窺われる。

## ④竈

竈は、「竈は五行集会して五味を熟し、飲食を調え、人命を保護するの□所なり。人居の根元大いに吉凶の弁あり。」とし、「向う方は東向き、辰巳向き、大吉。望み事成就。家のためになる人、出入り多し。」と吉相を述べ、「丑寅向き大凶。嫁姑不和口舌多し。」と凶相を示す。更に竈の数にも言及し、「数は、四つ、五つ、八つ吉なり。三つ可なり。」「一つ、二つ、六つ、九つ大凶。」と言う。

火も日々の生活に欠かせないため、「人居の根元」であるとし、重要視する。竈を設置する向きと火口の数にこだわり、方位のみならず数の吉凶も問題にする点の特徴である。

## ⑤窓

窓に関しては一文のみ載り、「窓は東南に開く事大吉なり。辰巳隅吉なり。南も可なり。其の外凶なり。」と言い、午前中から昼にかけての住まいへの日照を重視していることが明らかであるが、「其の外凶」とはいえ、当時の住まいでは長屋住まいでもない限り、四方に開口部がある場合が一般的である。

## ⑥池泉水、築山

池泉水は、「辰巳は大吉。家業繁昌し、家内和順なり。」と吉相

を述べ、「未申は大凶。病難多く、母に不孝の女子出る事有り。丑寅大凶なり。家相玄機にくわし。」と凶相を述べる。

築山は、「築山は戌亥に有るは大吉なり。」と吉相を、「丑寅、辰巳の方凶なれども、家の順逆によりて弁訳あり。」と凶相を述べる。

池泉水、築山は、何れも敷地内の庭に関する項目であり、池泉水は丑寅、未申を大凶とし、『家相玄機』という別の家相文献の名をあげて、それに詳しいと述べている。『家相玄機』は国書総目録によると刊年未詳の相法の書（写本）であり、寛政十一年（一七九九）に『家相玄機略』と称する文献が書かれたので、それ以前のものと推測される。

築山は戌亥が大吉であるとし、南表の敷地の後方にあたる戌亥に山を築き、住まいの日当たりを遮らず、北からの風を防ぐという機能にも見合う形を推奨している。なお、丑寅、辰巳の築山も「家の順逆」、即ち住まいの表面がどの方角を向くかによっては吉凶判断に差が出ると述べている。

純粹に方位のみにより吉凶が決まる場合と、敷地の前面道路の取り付き方（住まいの正面がどちらを向くのか）による吉凶とがあることを示しており、家相説独自の住まいの捉え方が分かる。

## ⑦畳間取り

畳間取りについては、「畳間取りは、家主あるじの居間を基とし、其の間つづきの相生相剋を以て吉凶を定むべし。相生なるを吉とし、

相剋を凶とするなり。一疊金、二疊金、三疊火、四疊木、五疊木、六疊水、七疊土、八疊土、九疊金、十疊金。右の例にて十払えにして其の数を見て五行に配当し、吉凶を定むべし。半疊は別に弁訳あり。角半疊、長半疊、三角疊各々別なり。四疊半は、別家、茶室は格別、平生用しげき間に用いれば、大いに凶なり。惣領に障り、次男は養子相続となり、又望み事不成就にして、無益の物入り多し。」と、長い説明書きがある。

次いで「四疊と六疊の間続きは望み事成就し、又酒宴など好み、人出入り多し。」と吉相を、「五疊と二疊か十疊は、先年井戸を埋めたる事有る住所にて、今は色情の口舌絶えず、物入り多し。」と凶相を述べるなど、疊数の組合せに応じた吉凶判断が続く。

疊間取りに関する吉凶は、方位には関係なく、疊数の組合せによる吉凶のみが問題となる。数に五行の木火土金水が当てはめられ、その五行の相生相剋<sup>12</sup>により吉凶判断が下される。これに半疊に関わる判断も加わり、更に複雑なものとなる。

疊が敷き詰められた部屋が続く近世の日本の住宅ならではの吉凶判断の方法であり、それが五行の相生相剋により意味づけられていることが特徴である。

## 五、『家相方位指南』の特徴

以上のように本書の家相判断に関する部分の内容を見てきたが、まとめると以下の七点が特徴としてあげられる。

①本書の構成は、文章と図、表からなるが、上巻で文章と図により家相判断の要旨をまとめ、中巻で年月別の方位別吉凶判断を図により示し、下巻で八卦と暦の図表を用いて、造作の時節に関わる吉凶判断を示している。家相判断の要旨はできる限り簡便にまとめられ、むしろ読者各人の本命星による作作の時節撰びを優先しており、暦による吉凶判断をより重視している。

②著者は家相判断の経験により編み出した内容であると言うが、具体的な判断例は示されず、吉凶判断の内容は他の同時代の家相書と異なる。

③その内容は、家屋敷の家相を整え、時節を撰んで普請、改築、引越など家屋敷に関わる作作を行う規範を示すものである。

④四神相応に関する記述では、唯一特徴が見られる。北に山、東に流れ、南に田圃（或いは池水）、西に大道が一般的であるが、本書では西に林があることを奨励している。

⑤吉凶判断の内容は、惣領の男子による血脈を絶やさず、家運を上げ、「お家安泰」を希求するものであり、凶方として丑寅と未申を結ぶ軸が意識され、それと直交する戌亥と辰巳の軸が吉方として重要視されている。

⑥住まいの日々の生活に必要なとされる、水、火、不浄に関わる部分が重要視され、方位別吉凶を見てもこの点では日本の住まいにおけるそれぞれの機能を果たすべく、無理のない判断が下されている。

⑦ 豊間取りに関しては、豊数に五行をあてはめ、続き間同士の豊数による五行の相生相剋により吉凶判断を下しており、一般的な家相文献の内容に外れない。

このように『家相方位指南』は読者に家相判断の内容のあらましを簡便に示し、それぞれの作事を行う時期に関して、読者各人の生年により暦上の判断を促すというものであることが明らかである。

## 結語

天保年間に記された本書が明治期に翻刻され、大正初期に再版されたという事実は、本書の内容とは別に、また興味深いことである。住まいの各所に目を配り、方位別にその意味を勘案し、時節を撰んで普請や改築を施すという気の配りようが、取りも直さず日本人の住まいに対する心情を物語ると思うからだ。

『家相方位指南』の方位別吉凶判断については、稿を改めて微細に分析し、同時代の家相文献のそれとの比較をしたいと考えるが、「住むための箱」としての物理的な判断だけでは済まない、日本人の住まいに対する精神的な捉え方、文化史的な側面にも今後注目を続けたい。

\*1 本稿では、『補訂版国書総目録』（一九九六、岩波書店）を参照している。

\*2 本稿では、『古典籍総合目録 国書総目録続編』（一九九〇、岩波書店）を参照している。

\*3 本稿では、『国書人名辞典』（一九九六、岩波書店）を参照している。

\*4 易学者が家相文献を記す例は他にもあり、加茂保久の『家相方位図説』などが見られる。

\*5 『家相新編』は明治初期の家相文献であり、江戸末期の家相説流布の状況を総括している。本文献については、本学紀要第三十八集でも取りあげ、また『家相新編』にみる明治期の家相説をめぐる状況」として、平成十三年に日本風俗史学会第四十二回大会で発表してゐる。

\*6 天保六年の世相については、吉原健一郎編『江戸東京年表』（一九九三、小学館）を参照している。

\*7 図表に題名がある場合はそのまま、ない場合は内容を鑑み記載した。

\*8 他家相文献の目次との比較に関して、詳しくは拙著『江戸時代の家相説』（一九九九、雄山閣出版）を参照されたいが、地相、敷地、母屋、庭に関わる方位別吉凶、鬼門や暦に関する言及をする、などが一般的な家相文献の構成である。

\*9 例えば松浦琴鶴『家相秘伝集』（天保十一年、一八四〇序）には、「ある人が宅図を持参して家相の相談に来たが、それを仔細に検分すると……」のように、著者である家相相者の家相考鑑の具体的な対応例が本文中に幾度も記載される。

\*10 家相文献の出典に関して、宅経とは『营造宅経』のことであり、中国の宋、元、明の時代に民間に流布した生活の書に見られる家づくりに関する吉凶を示した『居家必用』に収録されている。

\*11 家相文献の出典に関して、周書秘奥とは、『周書』（五十卷よりなる中国古代の周王朝の正史、或いは『書経』の周代のことを書いた部分）を言う。

\*12 五行の相生相剋とは、中国古代の概念であり、木火土金水の五元素により万物は成り立ち、それらの相互関係により物事は成り立つとする説。相生は互いの相性であり、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木と言ひ、木は火を生じ、火は燃えて土（灰）となり…とする考え方である。相剋はお互いを剋する間柄であり、水剋火、火剋金、金剋木、木剋土、土剋水と言ひ、水は火を消し、火は金属を溶かし…とする考え方である。